

「街の多文化発見カルタ」づくり ケータイを用いたアクティビティの開発

田尻信壹

Making 'Traditional Japanese Playing Cards (*Karuta*) Discovering Multi-culture of the town' : Development of an Activity using Cellular Phone (*Ketai*)

Shin-ichi TAJIRI

要旨

筆者が開発した携帯電話を用いたアクティビティでは、参加者に「イロハ48文字」の中からいくつかの文字を割り当て、参加者がその文字に対応する絵札と読み札を作ることで、「街の多文化発見カルタ」づくりのコラボレーションに加わることになる。参加者は携帯電話の内蔵カメラで街の多文化的状況を撮影して絵札を作り、それに対応する読み札の句を考える。現行学習指導要領では、調査活動やその成果の作品化などの活動が推奨されている。しかし、クラスが一体となって活動できるようなアクティビティは皆無と言って良い。この活動は、日本人の9割以上がもつという携帯電話を使い、クラス全員の分業と協業によるカルタづくりを通して、クラス全員が協力して「街の多文化的状況」を調べ、成果を共有することを目指したものである。

キーワード：携帯電話（ケータイ）、カルタづくり、多文化共生、教材開発

Keywords : Cellular phone (*Ketai*), How to make traditional Japanese playing cards (*Karuta*), Multi-cultural symbiosis, Development of teaching programs and materials

はじめに

本稿では、高等学校の「総合的な学習の時間」や地理歴史科で多文化共生の教育を推進するための教材開発として、筆者が開発した携帯電話（以下、「ケータイ」と表記する）を用いたカルタづくりを取り上げ、その方法と意義について検討する。

最初に、最近のケータイ事情についてみてみよう。今日のケータイは、通話のほかにメール、インターネット・アクセス、カメラ、外部記憶装置、近距離通信、ラジオ・テレビ機能、電子マネーなど多種多様な機能を備え、万能のツールとしての様相を呈するようになっている（小林哲生・天野成昭・正高信男 2007：7-14）。総務省の「通信利用動向調査」によれば、日本でのケータイ所有率は、2004年末現在で91.1%に達し（総務省 2005）、日本人のほとんどがケータイを所有するようになり、日本人のモバイル社会はほぼ達成されたとのことだ。

小林哲生らの調査によれば⁽¹⁾、2004年末現在の高校生のケータイ所有率は94.6%、中学生のそれは77.6%に達する。中高生の間でもケータイの所有は一般化しており、低年齢化が進行している（小林哲生・天野成昭・正高信男 2007：22-23）。

国立民族学博物館が発行している『月刊みんぱく』2006年7月号では、特集テーマとして「ケータイ」が取り上げられた（『月刊みんぱく』2006：2-7）。このことは、今日、ケータイが文化人類学の研究対象として認識されるまでになったことを示している。

ケータイの普及によって、現代人は快適で便利なコミュニケーション環境を手に入れることができた反面、ケータイの利便性に潜むネガティブな面への警鐘も強まってきた（正高信男 2003, 2005）。とりわけ、児童・生徒層に及ぼす影響が指摘されている（下田博次 2004）。そのため、中学校では、ケータイの学校への持ち込みを禁止したり、利用を制限したりしているところが多いと聞く。高校では、さすがに中学校のような状況は少ないが、教員から生徒に対してケータイ利用のマナーの悪さへの指摘をよく耳にする。学校でのケータイ利用に対する評価は、概して厳しいものがある。

しかし同時に、近年では、ケータイを積極的に教育現場で活用しようとする動きも芽生えてきた（井ノ口貴史 2002）。朝日新聞2007年8月12日付朝刊（13版）では、「大学では 今や筆記用具 リポートも作成」の見出しで授業でのケータイの積極的な活用が紹介されるなど、ケータイは若者にとって筆記用具化している⁽²⁾。若者の

間では、ケータイは私的コミュニケーションツールという認識の枠を越え、種々多様な活用法が模索されているといえる。

本稿では、富山大学教育学部2007年度前期授業の「地理歴史科教育法Ⅱ」で行った、「街の多文化発見カルタケータイでカルタづくり」の実践を中心に取り上げる。そして、ケータイを用いたアクティビティの開発と活用方法を提案し、その教育的意義について検討する。

1 ケータイを用いたアクティビティの開発

1-1 学校教育におけるカルタ活用の状況

最初に、学校教育におけるカルタ活用の状況について、概観してみよう。

学校教育でカルタを活用した実践や活用法、カルタに対する社会科教育論的考察については、山口幸男や原口美貴子によって「上毛かるた」を中心とした郷土かるた⁽³⁾に関する詳細な研究が行われている（原口美貴子 1995, 1996, 1997, 山口幸男・原口美貴子 1995a, 1995b, 1996, 1997）。郷土かるたの教育的意義として、郷土について学習でき関心を高められること、異年齢集団間や親子間の交流の中で協力的な態度が育てられること、記憶力・集中力などの能力が高められることなどがあげられている（原口美貴子 1997: 3）。

実際にカルタづくり（「読み札」づくり）を行った事例としては、小学6年の歴史学習での実践（松田孝 1996）や、JICA 横浜海外移住資料館を活用した教員ワークショップで行われた「移民カルタ」づくり（森茂岳雄・中山京子 2006: 43-45）⁽⁴⁾がある。松田は、カルタの読み札のもつ機能として、象徴性（読み札には歴史の事実や主張が端的に表現される）、一面性（読み札の表現が端的であるが故にとらえ方が一面的である）、相互性（カルタ一枚一枚の集まりが一つの主張の現れである）の3点をあげ、カルタの読み札づくりが児童の歴史認識を深めるとともに、社会なり時代なりの特性を理解する上での根拠を提供してくれることを指摘した（松田孝 1996: 77-80）。また、森茂・中山は「移民カルタ」づくりの意義として、ワークショップの議論や成果が具現化できること、ワークショップでの作業が「形」として残ることで参加者のモチベーションが高まること、制作されたカルタには参加した様々な立場の人々の思いが反映することをあげている（森茂岳雄・中山京子 2006: 45）。

1-2 「ケータイカルタ」アクティビティの概要

次に、筆者が開発した「ケータイカルタ」の作り方と活用の方法について述べよう。

「ケータイカルタ」づくりのアクティビティは、高校でのクラス単位の活動を念頭に開発した（中学校でも、実践可能である）。「イロハ48文字」の中からいくつかの文字が参加者に割り当てられる。参加者は割り当てられ

た文字数分の絵札をケータイ内蔵のカメラを用いてつくり、それに対応する読み札の句を考える。その文字に対応する絵札と読み札を作ることで、参加者は「ケータイカルタ」づくりのコラボレーションに加わることになる。このアクティビティは、クラス内の分業と協業によるカルタづくりを通して、クラスの全員が協力して学習することを旨とした活動である。

では、ケータイの写真機能は現在、どのような状況であるのか。NTTDoCoMo発行の『携帯電話カタログ』によれば、2007年8月現在、ケータイ内蔵のカメラの有効画素数は約320万～約130万であり、その多くがオートフォーカス、ズーム、フラッシュ、手ぶれ防止、セルフタイマー、動画記録などデジタルカメラ並の機能を有しており、デジタルカメラで撮ったものと遜色ない写真が撮影できる。撮影した写真は、ケータイの赤外線通信を用いれば、通信費用がかからずに他のケータイやプリンターへの送信が可能である。

近年、赤外線通信を用いて、ケータイやデジタルカメラから写真がプリントアウトできるケータイプリンタ「Pivi」（フジフィルム製）⁽⁵⁾が発売された。本機と本機専用フィルム（MPFP1）を用いると、ケータイで撮影した画像が名刺サイズでプリントアウトできる。このアクティビティでは、ケータイで撮影した画像を「Pivi」を用いてプリントアウトして絵札を作ることになる。

○用意するもの

ケータイカルタづくりの活動に必要なものを、以下に列挙する。

- ・カメラ内蔵のケータイ（赤外線通信機能を有する型。近年購入のものならば、この機能はほとんどの型に装備されている。）
- ・ケータイプリンタ「Pivi」と専用フィルム MPFP1（どちらも、フジフィルム製）
- ・細字用油性ペン（黒）
- ・マイタックラベル円形 ML-111（直径16mm, 赤・黄の2種）絵札と読み札に貼るので糊付きのもの
- ・読み札用台紙（厚手の画用紙を名刺サイズに裁断して作る。）

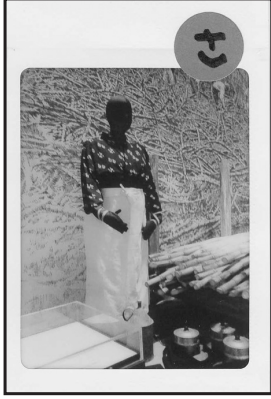
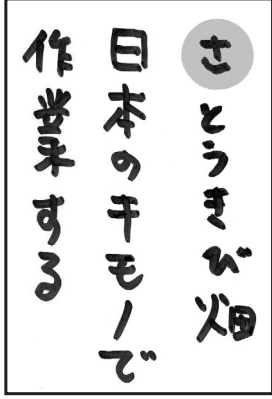
○絵札と読み札の作り方の手順

絵札と読み札の作り方の手順を整理すると、67頁の表1「絵札と読み札の作り方」の様になる。

1-3 「ケータイカルタ」アクティビティの実施状況

筆者は、これまでこのアクティビティを4回実践して来た（i～iv）。また、大阪府立茨木西高校教諭の柴田元氏による追試も行われている（v）。

表1 絵札と読み札の作り方

絵札の作り方	読み札の作り方
<p>a1 携帯電話の内蔵カメラで撮影</p> <p>a2 画像を携帯電話から「Pivi」へ赤外線送信</p> <p>a3 「Pivi」から受信後20秒で写真送出</p> <p>a4 写真の右上に円形ラベル(赤色)を貼る</p> <p>a5 円形ラベルに割り当ての文字を書き込む</p> 	<p>b1 読み札用台紙の右上に円形ラベル(黄色)を貼る</p> <p>b2 円形ラベルに割り当ての文字を書き込む</p> <p>b3 絵札(写真)を見て、読み札の句を考えて、読み札に書く</p> 
<p>* 上の絵札と読み札は、筆者が JICA 横浜海外移住資料館展示をもとに作成したものである。</p>	

(i) 博学連携みんぱく研修ワークショップ2006⁽⁶⁾

(2006年7月31日, 国立民族学博物館, 大阪府吹田市千里万博公園10-1)

「博学連携みんぱく研修ワークショップ2006」は、国立民族学博物館と日本国際理解教育学会の共催による教員研修ワークショップで、国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えることを目的に開催された。筆者は「ケータイで『みんぱく異文化発見カルタ』づくり」のワークショップを実施し、国立民族学博物館の展示品を活用したカルタ作りを参加者と一緒に行った。

会場となった国立民族学博物館は1977年に開設された博物館を併設する研究所であり、文化人類学、民族学に関する調査・研究と民族資料の収集と公開などの活動を行っている。博物館の展示は、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジアの9地域からなる地域展示と、音楽、言語からなる通文化展示により構成されている。展示品は一部を除いて撮影が許可されているため、ケータイによる写真撮影をスムーズに行うことができた。

(ii) 国際理解教育・開発教育研修会⁽⁷⁾ (2006年11月3日, 富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター, 富山県富山市五福3190)

「国際理解教育・開発教育研修会」は富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター主催の研修会であり、研修会には、国際理解教育・開発教育に関心をもつ教員、学生、市民が参加した。当日のワークショップでは、筆者は「ケータイを使っでの多文化カルタづくり」を指導した。

(iii) 富山大学教育学部2007年度前期授業「地理歴史科教育法Ⅱ」(金曜日3限)⁽⁸⁾

教育学部の授業「地理歴史科教育法Ⅱ」(受講生13名)の一環として、「街の多文化発見カルタ ケータイでカ

ルタづくり」のテーマで、2007年6月(4回の授業)に実施した。本稿では、この実践について次節で取り上げ、分析することにする。

(iv) 日本移民学会ワークショップ「移民を授業する」

(2007年8月5日, JICA 横浜海外移住資料館, 神奈川県横浜市中区2-3-1赤レンガ国際館)

筆者は、「移民を授業する」をテーマに「ケータイで移民カルタづくり」のワークショップを行い、海外移住資料館の展示品を絵札とするカルタづくりを参加者と一緒に行った⁽⁹⁾。

海外移住資料館は、日本の海外移住の歴史や日本人移民・日系人の生活について展示した施設である。同資料館では、ハワイを含む北米および中南米の日本人移民・日系人に関する諸資料(写真・映像・標本資料・レプリカ)が、「海外移民の歴史」「われら新世界に参加す」「ニッケイ・ライフ・ヒストリー」「日本の中のニッケイ」「世界の中のニッケイ」「デジタル移住スペース」の5コーナーに分かれて展示されている。館内では展示品を自由に撮影することができ、ボランティアが展示解説や来館者の質問に対応してくれるなど学習支援体制が整備されている。そのため、同資料館を訪問する中・高校生に対する学習アクティビティとして、本活動は有効であると思われる。

(v) 博学連携みんぱく研修ワークショップ2007

(2007年8月6・7日, 国立民族学博物館)

柴田元氏が、「オセアニア・カルタをつくろう」のテーマで、国立民族学博物館オセアニア展示を活用したケータイカルタのワークショップを実施した。

2. ケータイを使っでの「街の多文化発見カルタ」づくり

2-1 グローバリゼーション時代の教育課題

グローバリゼーションの進展の中で、近年では、地方

都市でも多くの外国人が居住し、生活する姿を日常的に目にするようになってきた。法務省入国管理局によれば、我が国の外国人登録者は2006年末に208万5千人に達し、総人口に占める割合は1.63%となった。十年前と比べると、1.5倍に増加した⁽¹⁰⁾。また、筆者が居住する富山県でも、同年末の外国人登録者は70カ国14,892人で、十年前と比べると、こちらもほぼ二倍となった⁽¹¹⁾。この状況からも、国際理解や身近な地域の国際化について学習し、多文化共生について、生徒が考えることは重要である。

現在、私たちの身近な地域でも、多くの外国人によって多種多様な習慣や文化が持ち込まれてきた。これからの教育課題として、児童・生徒たちには外国人の生活や文化、歴史を正しく理解し、偏見をなくしていくことが必要となって来た。そのためには、多様な文化をもった人々と共生していくための資質や技能の育成を目指すことが、今日の学校には求められている(中村水名子 2002)。

このような地域の国際化は、現代人の生活にどんな影響をもたらすことになったのだろうか。佐藤郡衛は、グローバルとローカルの結合が地域の国際化に次の3つの視点を提供することになったと言っている。すなわち、第一に、日常生活と世界の動向が直接結びつくようになったこと、第二に、地域間の関係が多層化しナショナル(国家的)な次元を介在させずに地域同士が結びつくことになったために、グローバル化という現象が地域の見直しの視点として浮上したこと、第三に、多くの地域で多民族化と多国籍化によって新しい地域づくりの必要性が生まれてきたことの、3点である(佐藤郡衛 1999:102)。

2-2 国立民族学博物館特別展「多みんぞくニホン -在日外国人のくらし-」から学ぶこと

国立民族学博物館が企画した特別展「多みんぞくニホン -在日外国人のくらし-」⁽¹²⁾(2004年3月25日~6月15日国立民族学博物館で開催。以下「多みんぞくニホン展」と略記する。)は、今日の日本社会の外国人市民の生活状況を示してくれたすばらしい展示であった。企画者の庄司博史氏は、この特別展の目的を来館者に現在の日本の多文化の実態を伝え認識を高めることで、日本社会の多民族化とその際に要求される共生の必要性への自覚を促すことであったと述べている(庄司博史・金美善編 2006:11)。展示場には、在日コリアン、在日中国人、在日ブラジル人(中南米出身者)、在日ベトナム人、在日フィリピン人の5つの移民エスニック・コミュニティのコーナーが設定され、そこに展示されたプライベートな情報を含む写真や文書、思い出と愛着の品々は、彼らの体験を見学者の目線で理解させ、共感させるものであった。とりわけ、在日コリアンコーナーに展示されていた東京都新宿区や大阪市生野区で撮影された写真中ハンガルの看板や張り紙、キムチなどの食材を販売するスーパーやビデオショップ、美容室などの存在は、見学者に日本

社会の多文化化の状況をみごとに可視化させてくれた(庄司博史 2004:66-79)。

日本社会の各民族や彼らの文化を個々に表象するのではなく、多民族的、多文化的状況下における民族間の交差性や関係性の中でとらえようとした展示(庄司博史・金美善編 2006:83)は、画期的な取り組みであったと評価できる。民族や文化をハイブリディティ(異種混濁性)と言う視点でとらえようとした今回の展示は、国際理解教育の新しい視点としても注目される。

2-3 地域の多民族、多文化の状況を可視化するためのポイント

街の多文化的状況や多文化共生の有り様は、漫然と観察しても見えてこない。観察する視点を明確にし、意識的に観察して初めて可能になる。では、どのような点に留意して観察すればよいのだろうか。本節では、この点について検討しよう。

「多みんぞくニホン展」では、日本社会の多民族的、多文化的状況と共生について、見学者に展示する際のポイントとして、以下の3点をあげていた(庄司博史 2004:18, 41-64)。

①自治体、NGO/NPO等の取り組み

外国人市民が日常生活を送る上で様々な制約や困難が存在するため、自治体は外国人市民が暮らす上ででの問題解決のために様々な取り組みを行う必要がある。具体的な取り組みとして、以下のことがあげられている。

- 自治体で行う外国人市民への行政サービスや生活情報の提供(たとえば、ゴミ収集所の表示、外国人への窓口相談、災害時等の避難路や情報提供など)
- 国際交流協会やNGO/NPOによる外国人市民に対するサービスや情報の提供
- 公共施設、交通標識、交通機関等に関する多言語表示

②エスニック・メディアの状況

エスニック・メディアとは、外国人市民の間の情報交換に用いられる新聞、雑誌、放送局のことを言う。その多くは、外国人市民自身によって母国語で編集・発行され、放送されている。

③エスニック・ビジネスの状況

外国人が独自のネットワークや特技を利用し、特定の領域で発達した経済活動は、一般にエスニック・ビジネスと呼ばれる。エスニック・ビジネスの具体例としては、以下のものがあげられる。

- 外国人市民を対象とするレストランや食材店、中古車ディーラー
- 日本人客をターゲットとしたエスニック・レストランや輸入食材店、雑貨店

日本社会の多民族的、多文化的状況と共生を展示するときのポイントとして「多みんぞくニホン展」であげていた上記の3点は、街の多文化的状況を可視化する際の

視点としても有効である。このほかにも、④商店や企業の多言語表示、⑤キリスト教会・モスク・廟などの宗教施設、⑥民族学校や外国語学校などの教育施設、⑦大使館・公使館などの施設、⑧外国との交流を記録したモニュメントなども、街の多文化的状況を可視化する際のポイントになる。

2-4 ケータイを使った「街の多文化発見カルタ」づくりの概要

ここでは、富山大学教育学部の平成19年度前期授業「地理歴史科教育法Ⅱ」の中で行った「ケータイを使った街の多文化カルタづくり」について報告する。

「地理歴史科教育法Ⅱ」では、学生に参加型アクティビティを体験させ、学生による教材開発の実践的技術の向上に主眼を置いて授業を行った。活動の概要は、以下の通りである。

①実施の時期および総時間

本活動は、現行学習指導要領の趣旨、地理歴史科各科目の性格や目標、内容に関する講義を終えた受講生に対して、単元開発の実践的力量を育成する目的で、その具体的事例として取り上げた。

高校でこの活動を実践する場合は、以下の学習領域、教科・科目で行うことが望ましい。実施時間数については、学校や生徒の実態に応じて、弾力的に運用することが望ましい。

- ・総合的な学習の時間⁽¹³⁾
- ・地理歴史科地理A
 - (1) 現代世界の特色と地理的技能
 - エ 身近な地域の国際化⁽¹⁴⁾

②活動の目標

高校で本活動を実践する場合の目標として、以下の3点があげられる。

- a) 生徒に、地域の多民族化、多文化化について「ケータイカルタづくり」のフィールドワークを通して理解させる。
- b) 生徒に、「ケータイカルタ」の絵札・読み札づくりを通して、地域の多民族化、多文化化の状況を適切に表現させ、発表させる。
- c) 生徒に、自分たちの作成したオリジナルカルタを使わせることで、地域の多文化的状況や外国人市民について共感的に理解させ、カルタづくりを通して獲得された成果のクラス内での共有化を図る。

③展開計画

○第1次○（「地理歴史科教育法Ⅱ」では90分で実施。高校では2校時での実施が望ましい。）

(I) 「移民カルタ」⁽¹⁵⁾ 「上毛かるた」⁽¹⁶⁾ を使ったのカルタ取り

本単元の導入として、数人で一グループを作り、「移民カルタ」や「上毛かるた」を使ってカルタ取りを行った。このような活動を行った理由は、カルタについての

興味・関心を高めるとともに、これから実施するカルタづくりへの主体的な参加を促すためである。カルタ取りの際には、絵札や読み札が意味することを意識させ、カルタがはたす学習上の意義について考察させるようにした。



「移民カルタ」を体験する受講生

(II) ケータイを使った「街の多文化カルタづくり」の活動についての説明

本活動を実施するにあたっての留意すべき事項として、以下の3点について検討させた。

- a) 街の多文化的状況として、どのようなものを選定したらよいのか。
- b) 街の多文化的状況を表現するためには、どんな写真（絵札）が適切なのか。
- c) 自分の考えた読み札の句が写真（絵札）の説明として、適切であるか。

(III) 絵札、読み札の担当者の割り振り

「地理歴史科教育法Ⅱ」の受講生は13人だったので、「イロハ48文字」の中から一人あたり3文字ないし4文字を割り当て、各自が作成する絵札と読み札を決めた。

○第2次○（配当時間については、第1次と同じにする。）

(IV) 富山大学内および富山市街等での写真撮影

富山大学や富山駅周辺等に分かれ、ケータイの内蔵カメラを使って、富山市街の多文化的状況を撮影した。

受講生が「街の多文化的状況」を撮影する際の視点として、2-3「地域の多民族的、多文化的状況を可視化するためのポイント」での整理をもとに、地域の実態を考慮しながら、以下の8点（a～h）に留意するように指導した。

- a. 県庁や市役所の外国人窓口での行政サービスや生活情報の状況について
- b. 公共施設、公共機関、交通機関での多言語表示について
- c. 国際交流協会やNGO/NPOの活動の実態について
- d. エスニック・メディアについて

- e. エスニック・ビジネスについて
- f. 外国語学校や日本語学校の実態について
- g. 教会・モスク・廟などの宗教施設について
- h. 外国や外国都市との交流・友好をあらわす品物や碑について

受講生の撮影傾向をみると、日本社会の多文化的状況ということで、外国起源のもの（a～h）と並んで、着物や城（富山城）など、日本の伝統文化に着目するなどの例が見られた。このことから、日本社会の多文化的状況を取り上げることは、同時に日本の伝統文化への関心にも向かうことが分かった。



絵札の写真として石灯籠を撮影する

○第3次○（配当時間については、第1次と同じにする。）

（V）絵札・読み札づくり

ケータイの写真をプリントアウトし、絵札とした。そして、絵札と対応する読み札を作成した〔資料1「街の多文化発見カルタ」絵札（抜粋）、資料2「街の多文化発見カルタ」読み札（一覧）を参照〕。

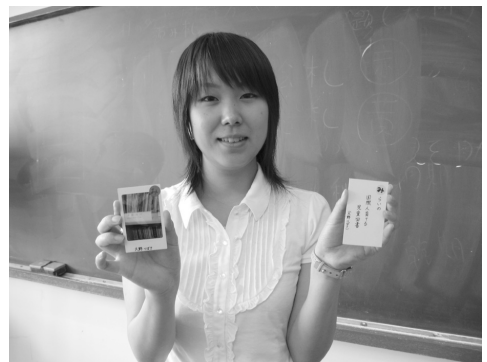


ケータイからPiviに送信してプリントアウト

○第4次○（配当時間については、第1次と同じにする。）

（VI）オリジナルカルタを使ってのカルタ取り

「多文化発見カルタ」の披露とそれを用いたカルタ取りを行った。その後、富山市街の多文化的状況について、作成したカルタを題材にして話し合った。



自分のつくったカルタを披露する学生たち



学生たちがつくった「街の多文化発見カルタ」

（VII）ケータイを用いた「街の多文化発見カルタ」の教材としての意義についての検討（課題レポート）

最後に「高校で『街の多文化発見カルタ』を作らせることで、生徒にどんなことを気づかせ、理解させることができると思うか」という課題を出し、200字程度にまとめさせて提出させた（「課題レポート」の作成）⁽¹⁷⁾。

提出されたりポートの中で、特徴的なものを5編選んで、以下に列挙した。では、レポートに見られる特徴について分析してみよう。

資料1 『街の多文化発見カルタ』絵札（抜粋）



(ろ) 露・韓・中・英
いろいろな言語の
バス案内



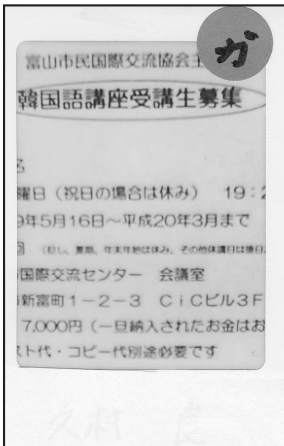
ぱん (パン)並ぶ
ドイツの味が
街角に



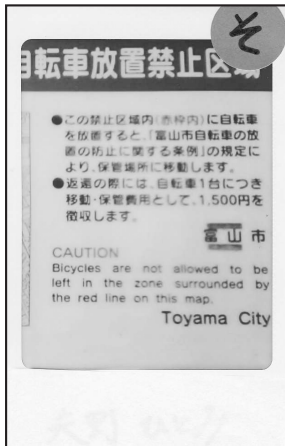
(ほ) 香港からきた
あなたも大丈夫
富山地鉄電車



ぬけ目なし
多言語表記の
ごみカレンダー



かんこくご (韓国語)
ヨン様めがけて
サランヘヨ



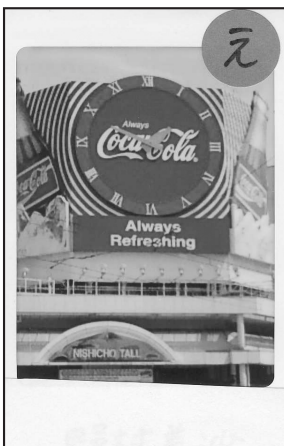
それ禁止
あなたの自転車は
放置自転車？



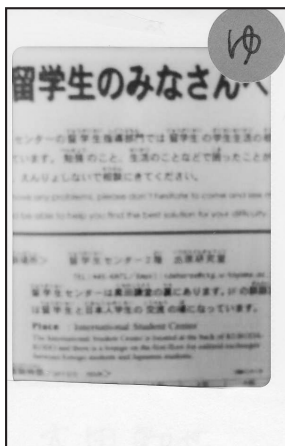
のってるよ
日本のニュース
多言語で



(け) 健常者・視覚障害者
外国人みんなが分かる
ランドマーク



えいご (英語) 表示は
万国共通
コカコーラ



ゆめいっぱい
富山大学
留学生



みらい (未来) の
国際人育てる
児童図書



すてきな
富山のシンボル
富山城

資料2 『街の多文化発見カルタ』読み札（一覧）

	読み札の句			撮影物・場所	撮影した理由
い	いかす味	グラツェと言われ て	また来よう	サイゼリアの看板 JR 富山駅前 CIC 4 階	イタリアン（レストラン）といえば、サイゼリア。 みんながよく知っているから。
ろ	(ろ) 露・韓・中・ 英	いろんな言語の	バス案内	バス乗り場案内 JR 富山駅	富山空港行きの案内板が、日本語のほかに英語、 ハングル、中国語、ロシア語の5言語で表示され ていた。
は	ぱん（パン）並ぶ	ドイツの味が	街角に	「ジャーマン」の看板 富山市総曲輪通り	「ジャーマン」（店）の看板にドイツ国旗があった。 ここでは、本格的なドイツパンが売られていた。
に	にほん（日本）とは	真逆位置する	サンバの国	ポルトガル語の看板 富山市荒町	道沿いにブラジルの国旗が描かれたポルトガル語 の看板が目に入ったので。
ほ	(ほ) 香港からきた	あなたも大丈夫	富山地铁電車	富山地铁の乗り場案内板 富山駅構内の地铁乗り場	地铁富山駅から降りてくる中国人観光客の一団を 発見した。地铁乗り場案内は、英語、ロシア語、 中国語（繁体字、簡体字）ハングルからなる多言 語表示であった。
へ	ベルギーと	富山は	意外と仲良し	ベルギーからの贈り物 CIC 国際交流センター内	富山でベルギーの皿を見つけて感動した。富山と ベルギーの結びつきを知って驚いた。
と	とおらばリーチ	メンチンイッター	倍満の手	雀荘の看板 JR 富山駅前	マージャンは中国のゲーム。自分も時々やるので、 街角の雀荘「平和荘」が目に入ってしまった。
ち	ちゅうごく（中国）の	秦皇島市は	姉妹都市	中国の掛け軸 CIC 国際交流センター内	富山市の姉妹都市・秦皇島市（中国）から贈られ た掛け軸。CIC にはよく来るが、こんな機会で ないと目に入らない。
り	(り) リズミカル	皆楽しく	ボンディスコス	CD 店の看板 富山市中央通り	ボンディスコスはラテン系、とりわけブラジル音 楽の品揃えが充実した CD 店として富山市内で有 名なので。
ぬ	ぬけ目なし	多言語表記の	ごみカレンダー	多言語表記のごみカレンダー 富山市役所内	市役所を訪ねてみると、外国人がたくさんいた。 外国人のためのものがあるか探していく内に見つ けたのが、多言語表記のごみカレンダー。
る	るんると	うかれ気分で	チャリ置くな	放置自転車禁止区域の看板 JR 富山駅前	駅前にあった「無断放置の自転車に対する注意表 示」。多言語表示が目にとまり、外国人も放置自 転車をするのかな？と思い、興味がおこったので 絵札とした。
を	(を) おおざらに	盛って騒ごう	バリ料理	バリ料理店のディスプレイ 富山市中教院通り	最近、東南アジアのエスニック料理が流行とのこ と。でも、インドネシアのバリ料理店が富山市に あるとはびっくりした。
わ	(わ) 和の出発点	日本語教室	in 太閤山	日本語教室の予定を書いたピラ CIC 国際交流センター内	富山市に隣接するの射水市には、最近、日系ブラ ジル人やロシア人が多数住んでいる。この日本語 教室のピラはそんな人々に対する教室かな？。 英語、中国語、ロシア語など多くの言語で表記さ れたピラがたくさん置いてあった。
か	かんこくご（韓国語）	ヨン様めがけて	サランヘヨ	韓国語講座募集のピラ CIC 国際交流センター内	CIC 内で開講されていた韓国語教室のピラ。当日 も授業があり、韓国の方が講師で教えられていた。
よ	よくきたね	中国からの	おくりもの	中国製おもちゃの展示 CIC 国際交流センター内	中国の姉妹都市から送られてきたおもちゃ。小物 なので見過ごしてしまいがちだが、注意してみ ると、意外なものに国際交流のあとを発見できる。
た	たくさんの	人たち招く	国際会議場	富山国際会議場の看板 富山市丸の内	全日空ホテル隣のビルで発見した「富山国際会議 場」を表記した4カ国語（日、英、中 [簡体字]、 ハングル）表示の掲示。
れ	れきし（歴史）が長い	茶道の	茶釜	茶釜 富山市西町	多文化という視点で街をみたら、今まで気づけな かった日本らしさを発見した。それが「茶道の茶 釜」だった。
そ	それ禁止	あなたの自転車は	放置自転車？	放置自転車禁止区域の看板 JR 富山駅前	富山駅前の自転車放置を注意する看板。日本語と 英語の2カ国語表記だった。放置自転車は万国共 通かな？！
つ	つながってるよ	国境越えた	姉妹都市	富山市の姉妹都市を紹介した パネル CIC 国際交流センター内	富山市姉妹・友好都市の名前が列挙されていた。 富山市と外国との結びつきが発見できた。
ね	ねぇボール	あなたもわかる	郵便貯金キャシュ サービス	郵便局の案内パネル 富山市中教院通り	民営化で何かと話題が多い郵便局。日本的と思っ ていた郵便局案内に英語表記を見つけて驚いた。
な	なかよくなりた	留学生の気持ち	つまった掲示板	留学生用の掲示板 CIC 国際交流センター内	留学生のメッセージが書かれたコーナー。「日本 人の友達がほしい」「仲良くなりた」というメッ セージがたくさん目に飛び込んできた。この掲示 板を多くの学生に見てもらいたいと思った。
ら	(ら) ライトには、 その他	レフトに手紙と	はがき	郵便ポスト 富山市四十物町	投入口の下に書かれた「日英二言語表記の注意」。 日本語が読めない外国人にはとても便利だと思う。
む	むだにしない	ここで学んだ	語学力	富山YMCAの案内 JR 富山駅前	YMCA のフリースクールの看板。ここでは、英 語、中国語、ハングルが富山に住むネイティブの 人が教えてくれる。
う	うなづき（宇奈月） に	行くときゃ、ここに	寄ってあげて。	観光案内所の看板 JR 富山駅前	富山の観光名所案内が、英語、中国語、ハングル、 アラビア語など多くの外国語で書かれていた。海 外からの観光客の受け入れを富山も積極的に行っ ていると感じた。

「街の多文化発見カルタ」づくり ケータイを用いたアクティビティの開発

	読み札の句			撮影物・場所	撮影した理由
あ	(あ) イタリアン	パジルとトマトは	はずせない	イタリアレストランのディスプレイ 富山市荒町	荒町交差点で見つけたイタリアレストラン。イタリアンの店は、街のあちこちで普通に目にする。パジルもトマトも、もう日本の食材として定着。
の	のっているよ	日本のニュース	多言語で	外国語新聞(英字・中国語) CIC 国際交流センター内	CIC 内で見つけた英字新聞と中国語新聞。どちらも日本国内でつくられた外国語新聞で、日本のニュースが英語や中国語で紹介されていた。
お	おーマイゴッド	Nove のせいで	経営危うし	英会話学校の看板 JR 富山駅前	駅前留学の波が富山にも押し寄せてきた。富山駅周辺にはたくさんの英会話学校が進出している。国際化の時代は英会話が必須?!
く	(く) グローバルな	国際交流	世界をつなぐ	富山市民国際交流協会の看板 CIC 内	日、英、中、ハングル、ポルトガル語で表記。今回、このような団体が富山にもつくられていたことを知った。
や	やす(安) いのに	味は抜群	ラーメン・餃子	チャイナハウス 富山市西町(大和デパート近く)	考えてみれば、中華料理は最も身近で、代表的な異文化料理。だいが日本化しているけども・・・
ま	まあ素敵	浴衣は夏の	風物詩	浴衣姿のマネキン 富山市西町	西町の呉服店に飾ってあった浴衣姿のマネキン。日本文化も広く見れば、多文化の一つだから・・・
け	(け) 健常者、視覚障害者	外国人みんな分かる	ランドマーク	館内の案内板 富山大学中央図書館	富山大学中央図書館1階に設置されていた点字、英語併記の案内板。点字でも書かれていたことを今回、初めて発見した。
ふ	ふあん(不安) なときに	教えてくれる	案内板	駅構内の案内板 JR 富山駅	駅構内の案内板が、日本語、英語ばかりでなく、点字でも表記されていた。触ると、輪郭が浮かび上がってきて、構内の構造が分かる。触って分かる案内板は、初めての体験であった。
こ	この店で	バイトしました	フランチパニ	フランチパニの看板 富山市総曲輪	この店はヨーロッパの香りがする。かつてこの店でアルバイトしたことが思い出された。
え	えいご(英語) 表示は	万国共通	コカコーラ	コカコーラの時計台 富山市西町	コカコーラはアメリカのアトランタに本社がある多国籍企業で、世界中のどこにもあるイメージなので。コカコーラは英語の表記と併せて、グローバル化を象徴している。
て	ていけつ(締結) 記念	海を隔てた	友好都市	日中友好記念の碑 富山城趾公園	富山城内に建ててあった日中友好記念の碑。1981年に、富山市と秦皇島市の友好都市の締結を記念して建てられた。
あ	(あ) アメリカの	都市と富山市	姉妹都市	ダーラム市を紹介したパネル CIC 国際交流センター内	富山市と友好都市を結んでいるアメリカのノースカロライナ州ダーラム市を紹介したパネル。
さ	さゝ結婚	しかし、待つのは	地獄のみ	教会 富山市本郷町	自分が住んでいる町にあった教会。なにげなく見てきた風景だが、キリスト教の宗教施設と思うと奇妙な感じがする。
き	きものと帯	日本人の	心の象徴	呉服店の展示品 富山市西町	多文化を考える上で、日本文化を忘れてはいけないと思い、呉服店に展示してあった着物の写真を入れた。
ゆ	ゆめいっぱい	富山大学	留学生	留学生への掲示 富山大学留学生センター内	今回、カルタを作るために大学内を回って発見したのが、留学生センター。富山大学にもたくさんの留学生がいることを実感したポスターである。
め	(め) メイドカフェ	ここで作られるのは	カフェより萌え	メイドカフェの看板 CIC 4階	日本しかないメイド喫茶を発見。日本が誇る新しい文化だと思ったので。
み	みらい(未来) の	国際人育てる	児童図書	外国語の児童図書 CIC 国際交流センター内	子ども向けの外国語図書の展示。この本を手にとると、子どもも自然と外国のことに興味をもつようになると思ったので。
し	しまい(姉妹) 都市	アメリカ国旗が	よく目立つ	ダーラム市のコーナー CIC 国際交流センター内	姉妹都市、ダーラム市(アメリカ)からの富山市への贈り物。富山市が外国との友好に努めていることが分かる展示だったので。
ゑ	(ゑ) えっなんで?	自由の女神が	富山にも	自由の女神像 富山市総曲輪	総曲輪の通りの一角で見つけた「自由の女神像」。意外なところでアメリカの象徴を発見して驚いた。
ひ	ひー辛い	本場のインド料理店	サントシー	サントシー 富山市神通本町	富山市では、誰もが知っている有名なカレーレストラン。インド人シェフがつくっている。
も	もだーん(モダン) な	建物	昭和のかほり	大和デパートビル 富山市西町	空襲も生き延びた、富山市のシンボリック建物、大和デパートビル。今年9月には移転のために取り壊される。モダンでヨーロッパの雰囲気があるので、取り壊しは残念。
せ	せつめい(説明) しよう	世界屈指のIT企業	それがIBM なのだ	IBM のロゴ入り看板 富山市中教院通り	IBM は誰もが知っている、IT関係のグローバル企業である。おしやれでかっこいいロゴが気に入った。
す	すてきな	富山のシンボル	富山城	富山城(郷土博物館) 富山城址公園内	富山城は再建とは言い、富山のシンボル。城ほど日本文化をイメージさせるものはないと思ったので。
ん	ボ(ん) ンジョルノ	吹けイタリアの風	カフェ54	カフェ54の看板 富山市西町	カフェ54は富山市で人気のイタリアレストラン。イタリアンは中華と並ぶ日本人が食べる外国料理ということで選んだ。

* を=「お」音、あ=「い」音、ゑ=「え」音で代用する。ん音は「きょう(京)」「江戸いろはカルタ、京いろはカルタでは、んは「上がり」を意味するので)ないしは、んを句の途中に挟む。

** 本資料は、受講生が提出した「ケータイカルタづくりシート」をもとに筆者が作成した。

(A)「写真を撮るために市街を散策することによって、いつもは余り意識していない都市の景観に目を向けることができた。これは地理の学習にもなる。また、多文化を見つけることで自分の住む都市が外国の都市や文化とどのように関わっているかを知ることができる。グローバル化が進む社会の中で子どもたちは多文化に触れる機会が多くなって来ていると思われる。そのため、このカルタづくりは、自分の街のグローバル化を認識するよい機会になると考えられる。そして、子どもたちの多文化への興味・関心を高める一助になると思った。」(244字)

(B)「いつも気づいていないことや何げなく通り過ぎてしまう、あれやこれやということに気づくことができる。また、日本文化も多文化の一つということを自覚させ、カルタという日本古来の遊びを使って日本文化を見直すよい機会となる。テーマは『多文化』に限らず何でも可能である。教材としては応用性があり、利用する範囲が広く、いろいろなテーマの学習に活用できると思う。自分としては、郷土や街の特徴などを調べる学習で使ってみたいと思う。」(205字)

(C)「実際に自分の足で町を歩いて、カルタを完成させることで、普段気がつかなかった自分の町の発見につながると思った。テーマを多文化に絞ることで、自分の住んでいる町がいかにも多文化化、多民族化しているのか、また外国人にとって自分の町のどんなところが住みにくいのが発見できる。カルタの読み札は五七五の俳句調で作られ、生徒も五七五調にしようとする。無理に五七五調にしないでよいと指導しなければならぬが、カルタ作りは国語との連携も可能なので、総合学習としても位置づけられる。」(237字)

(D)「ケータイのカメラ機能が授業で活用できることには驚いた。ケータイを活用したカルタの絵札づくりは、町の様子を記録する上で有効な方法であることが分かった。読み札をつくるという作業と一体化させることで、いつも何気なく見てきた町の様子を、きちんとそれも簡単に発見することができた。カルタづくりという方法は、個人の活動とクラス全体の活動とがうまく融合していて面白いと思った。カルタは古くさいと思っていたが、意外とはまるものだった。」(211字)

(E)「カルタをつくるという作業は、同じテーマを調べる他の活動に比べて、ケータイで写真を撮ったり写真を見て句を考えたりと、いろいろな要素が入っていて楽しくできる。文章にまとめるレポートが苦

手な生徒でも、ケータイカルタづくりは楽しくできると思う。それに一人一人の作ったカルタを集めると、オリジナルな一組のカルタセットが完成するという点も魅力的である。また、カルタ取りをすることで、一人一人が調べた多文化の様子がクラス全体の知識として共有できると思った。」(221字)

「ケータイカルタ」づくりの意義として、多くの生徒が、普段気が付かなかった地域の多文化的状況を可視化できたことをあげていた。この活動は「自分の街のグローバル化を認識するよい機会になる」との感想も寄せられた。また、「ケータイカルタ」づくりが地域の多文化に限らず、他のテーマでも実践できるとして、教材としての汎用性を評価する声もあった。「カルタの読み札づくりを通じて国語との連携が考えられる」、「写真を撮ったり写真を見て句を考えたりできる」など、総合学習としての可能性について言及する意見も見られた。

また、作成したカルタを使って行うカルタ取りを通じて、「一人一人が調べた多文化の様子がクラス全体の知識として共有できる」ことをあげる声もあった。「1-1学校教育におけるカルタ活用の状況」で整理したように、カルタの一枚一枚に制作者のそれぞれの思いや主張が込められていることを考えると、48枚の絵札・読み札、それぞれに表現された写真や句をクラス全体、あるいは参加者全体で共有化することは、大変意義のあることと言える。

現実には、教員が「街の様子をよく見てその特徴を記録しなさい」と指示しても、多くの生徒が戸惑いの表情を浮かべるのが、学校の実態であろう。「ケータイカルタ」づくりは、戸惑いの表情を浮かべていた生徒たちにとっても、自然に参加できるアクティビティであると言える。

おわりに

カルタづくりはクラスの全員が一体となって参加し、活動できるアクティビティである。高校生の9割以上が所有するケータイを使い、クラス全員の分業と協業による「カルタづくり」を通して、協力して「街の多文化的状況」を学ぶことを目指した活動である。ケータイを教室に持ち込むことには色々な議論があろう。小・中学校では、携帯電話の学校への持参を禁じているところも多いと聞く。ケータイの普及状況を考えるならば、「コンプスの卵」の例の如く、学校や教員も発想を転換し授業で活用していくことを考えてみてよいであろう。

註

(1) 本調査は質問紙による調査で、首都圏および関西圏に住む12歳から76歳までの1,041人を対象に2005

年8月13日～同年9月12日までの1カ月間に複数回にわたって実施された。本調査での12歳から18歳までの年齢群(中学生)に属する調査対象者は、106人である。詳しくは、小林哲生の「ケータイの使用に関する調査」(小林哲生・天野成昭・正高信男 2007: 14-19)を参照のこと。また、ベネッセの調査報告書(小林哲生・天野成昭・正高信男 2007: 23)によれば、2004年末現在の高校生のケータイ所有率は93%で、小林哲生らの調査と近似の結果となった。中学生のケータイ所有率は、1年生が35%、2年生が46.4%、3年生が54%であった。

(2) 朝日新聞2007年8月12日付朝刊(13版)3面コラム「ケータイが変える 変わる選択の時」(記事)には、小レポートの携帯での作成とメールでの送信(広島国際大学・丁井雅美准教授の実践)や出欠確認・授業評価・内蔵カメラによる板書撮影(宮城教育大学・安藤明伸准教授の実践)などのケータイの活用法が紹介されている。

(3) 原口美貴子(1997)『50周年記念「上毛かるた」県競技大会展示 全国郷土かるた目録』群馬大学郷土かるた研究会, 1997, pp.2-3。

「郷土かるた」とは、郷土の自然や歴史、文化、産業など、その地域を代表するような様々な事象が詠み込まれている「いろはかるた」のことを言い、最も著名なものが群馬県で1947年に作られた『上毛かるた』である。

(4) 森茂岳雄・中山京子(2006)「海外移住資料館を活用した国際理解教育の授業づくり - 教師研修を通してみた移民学習の可能性 -」JICA 横浜海外移住資料館編『研究紀要・館報』1, pp.44-45。

森茂岳雄・中山京子を中心となって行った4回の教職員研修ワークショップ(2003年1月31日, 2004年7月31日, 2005年3月5日, 同年8月25日)では、JICA 横浜海外移住資料館の展示資料を活用し、グローバル教育と多文化教育のインターフェイスを意識した学習教材の開発と検討が行われた。ワークショップの成果は「移民カルタ」や紙芝居「海を渡った日系移民」「ブラジルのカリナ」等の制作に生かされたと言う。

「移民カルタ」の制作は以下の過程を経て完成した。第1回研修会(2003年1月31日)で、講師から示された読み札のひな形を参考に参加者が他の読み札を作成した。第2, 第3回研修会(2004年7月31日, 2005年3月5日)で詠まれた読み札の句を整理し、絵札の絵や写真を作成し、「移民カルタ」として試作品化した。第4回研修会(2005年8月25日)では、完成したカルタを実際にどのように活用するか等が検討された。このとき制作された「移民カルタ」は、JICA 横浜海外移住資料館の見学者に対する学習教材として、同資料館で利用されている。

(5) フジフィルムが、2005年11月に販売開始したケータイプリンタ(製品名:MP-70)。赤外線によるワイヤレスインターフェイスを採用しているため、赤外線通信可能なケータイで撮影したものならば簡単に鮮明な写真がプリントアウトできる。機体の大きさは129×100×29mm、重さは210g。

(6) 「博学連携みんぱく研修ワークショップ2006」に関する報告として、「国際理解教育における博物館活用の可能性(2) - 第二回国立民族学博物館を活用したワークショップ型研修の試み -」(日本国際理解教育学会『国際理解教育』VOL.13, 2007)がある。

(7) 国際理解教育・開発教育研修会で筆者が行ったワークショップの報告として、田尻信壹ほか2名「国際理解教育の実施状況に関する研究」(『富山大学スクラムプラン - 学校バリアフリーの挑戦2006 -』富山大学人間発達科学部, 2007)がある。国際理解教育・開発教育研修会の様子については、北陸中日新聞2007年7月17日付朝刊(13版)に筆者が投稿した記事を参照して欲しい。

(8) 富山大学教育学部の2007年度前期授業「地理歴史科教育法Ⅱ」で行った「街の多文化発見カルタ ケータイでカルタづくり」については、日本社会科教育学会第57回全国研究大会(2007年10月8日, 埼玉大学教育学部)で発表した。

(9) 海外移住資料館の展示を活用したケータイカルタづくりの活動については、田尻信壹「ケータイ(携帯電話)を使ってのカルタづくり」『海外移住資料館 学習活動の手引き<改訂版>』JICA横浜国際センター海外移住資料館, 2007年, pp.20-21を参照のこと。

(10) 法務省入国管理局統計 <http://www.immi-moj.go.jp/toukei/index.html> (2007年8月20日取得)

(11) 富山県外国人登録国籍別人員調査結果 http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1005/index.html (2007年8月20日取得)

(12) 特別展「多みんぞくニホン - 在日外国人の暮らし -」は、国立民族学博物館を会場に2004年3月25日から6月15日までの70日間開催され、この間に約3万7000人の入場者があった(庄司博史・金美善 2006: 14)。

(13) 現行学習指導要領によれば、「総合的な学習の時間」の学習活動の例として、情報、環境、福祉・健康と並んで、国際理解があげられている(文部省[現・文部科学省] 1999a: 174)。

(14) 「身近な地域の国際化」の取り扱い方法として、現行学習指導要領解説では、「身近な地域で国際化の進展を示す地理的事象に着目して調査する」といった学習活動を通して、生徒の生活圏、行動圏にも国際化が進展していることを具体的にとらえさせ

るよう工夫する」(文部省 [現・文部科学省] 1999b : 174) ことをあげている。

- (15) 「移民カルタ」の利用については、JICA海外移住資料館 (TEL.045-663-3257, E-mail:info@jommm.jp) に相談するとよい。
- (16) 「上毛かるた」の発行は、財団法人・群馬文化協会 (前橋市紅雲町 2-1-19, TEL.027-223-6883) が行っている。
- (17) ケータイの効果的活用方法を模索するならば、受講生に、授業中にケータイを使って小レポートを作成させ、ケータイメールで筆者宛に送信させる方法を検討するのも面白い。このようにすれば、提出された小レポートは電子化されるので、データの保管や学生に情報をフィードバックする際に便利である。

引用文献

- 井ノ口貴史 2002. 「『ケータイ』から世界が見える」日本国際理解教育学会編『国際理解教育』VOL. 8 国立民族学博物館 2006. 「特集・ケータイ」『月刊みんぱく』2006年7月号 (第30巻第7号, 通巻346) 国立民族学博物館
- 小林哲生・天野成昭・正高信男 2007. 『モバイル社会の現状と行方 利用実態にもとづく光と影』NTT出版
- 佐藤郡衛 1999. 『国際化と教育 - 異文化間教育学の視点から-』放送大学教育振興会
- 下田博次 2004. 『ケータイ・リテラシー - 子どもたちの携帯電話・インターネットが危ない!』NTT出版
- 庄司博史編著 2004. 『多みんぞくニホン - 在日外国人のくらし-』財団法人千里文化財団
- 庄司博史・金美善編著 2006. 『多民族日本のみせかた - 特別展「多みんぞくニホン」をめぐって』国立民族学博物館調査報告64, 人間文化機構国立民族学博物館
- 総務省 2005. 『通信利用動向調査』
- 中村水名子 2002. 『多民族・多文化共生の明日を拓く社会科授業』三一書房
- 原口美貴子 1995. 「学校教育における上毛かるたの活用」『群馬大学教育実践研究』12
- 原口美貴子 1996. 『上毛かるた その日本一の秘密 (上毛文庫 35)』上毛新聞社
- 原口美貴子 1997. 『50周年記念「上毛かるた」県競技大会展示 全国郷土かるた目録』群馬大学郷土かるた研究会
- 正高信男 2003. 『ケータイを持ったサル 「人間らしさ」の崩壊』中公新書
- 正高信男 2005. 『考えないヒト ケータイ依存で退化した日本人』中央新書
- 松田孝 1996. 「歴史カルタづくりと課題化認識の方法 - 小学校6年生の歴史学習を通して」上越教育大学社会科教育学会編『上越社会研究』11

森茂岳雄・中山京子 2006. 「海外移住資料館を活用した国際理解教育の授業づくり - 教師研修を通してみた移民学習の可能性 -」JICA横浜海外移住資料館編『研究紀要・館報』1

- 文部省 [現・文部科学省] 1999a. 『高等学校学習指導要領』大蔵省 [現・財務省] 印刷局
- 文部省 [現・文部科学省] 1999b. 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版
- 山口幸男・原口美貴子 1995a. 『郷土かるたと郷土唱歌 その社会科教育論的考察』近代芸社
- 山口幸男・原口美貴子 1995b. 「郷土かるたの全国的動向 その社会科教育論的考察」『群馬大学教育学部人文・社会科学編』44
- 山口幸男・原口美貴子 1996. 「上毛かるたの札の分析 社会科郷土資料の基礎資料として」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』45
- 山口幸男・原口美貴子 1997. 「上毛かるた50周年記念フォーラムの記録 群馬の宝, 日本一の上毛かるた」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』46
- 山田雅夫 2003. 『ケータイ「メモ撮り」発想法』光文社新書
- JICA横浜海外移住資料館 2007. 『海外移住資料館 学習活動の手引き〈改訂版〉』JICA横浜国際センター海外移住資料館
- NTTDoCoMo 2007. 『携帯電話カタログ2007 08』NTTDoCoMo

【付記】70頁左側の2枚の写真は、ケータイを使ったカルタづくりの様子を再現するために、小暮和音君 (高校2年生) に協力して頂き、撮影したものである (撮影者: 小暮幸男氏)。小暮幸男氏, 和音君には、あつく感謝します。

(2007年8月24日受付)

(2007年10月23日受理)